

## 会 議 録

会議の名称		平成30年度第1回つくば市総合教育会議			
開催日時		平成30年5月29日（火）13時30分から15時30分まで			
開催場所		つくば市役所5階庁議室			
事務局（担当課）		総務部総務課			
出席者	委員	五十嵐市長、門脇教育長、鈴木教育委員、小野村教育委員、柳瀬教育委員、倉田教育委員			
	その他	《教育局》森田局長、大久保次長、中山次長 《教育総務課》貝塚課長、吉沼課長補佐、笹本課長補佐、宇津野係長、青木係長			
	事務局	藤後総務部長、吉沼総務部次長、中泉課長、奥沢課長補佐、荒澤課長補佐、高野係長、東泉主査、渡邊主任、鈴木主任			
公開・非公開の別		<input checked="" type="checkbox"/> 公開	<input type="checkbox"/> 非公開	<input type="checkbox"/> 一部公開	傍聴者数 4名
非公開の場合はその理由		—			
議題		(1) 教育大綱の概要について (2) つくば市教育大綱の方針について (3) 教育大綱策定スケジュール（案）について			
会議録署名人				確定年月日	平成 年 月 日
会議次第	1	開会			
	2	市長挨拶			
	3	協議事項			
		(1) 教育大綱の概要について (2) つくば市教育大綱の方針について (3) 教育大綱策定スケジュール（案）について			
	4	閉会			

＜審議内容＞

事務局：ただいまから平成 30 年度第 1 回つくば市総合教育会議を開催します。

開会に当たり、五十嵐市長から御挨拶申し上げます。

市長：今日は今年第 1 回の総合教育会議ということで、本年度主に教育大綱策定について協議をいただき、つくばの教育がどこを目指すのかについて御議論いただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

事務局：本日の会議に先立ち、出席者を報告させていただきます。

【出席者報告】（総務部、教育局）

事務局：続きまして委員の自己紹介をお願いいたします。

【委員自己紹介】（門脇教育長→小野村委員→倉田委員→柳瀬委員→鈴木委員）

【配付資料確認】

事務局：それでは、協議事項に入ります。ここからの議事進行は、五十嵐市長にお願いいたします。

市長：まずはつくば市教育大綱について、事務局から概要の説明をお願いします。

(1) 教育大綱の概要について

総務課長：【資料 1 について説明】

市長：ありがとうございました。それでは次の「つくば市教育大綱の方針について」に入ります。

(2) つくば市教育大綱の方針について

市長：教育大綱は大きな方向性だと思います。首長が定めるとなっているので、私の考える教育大綱の案を出そうかと思ったのですが、現状をもう一度確認したいという思いが強いため、日頃から教育に対して思っている考えを先にお話したいと思っております。前段の確認として、「A一つしかない答えを正しい知識で回答し、決められたルールはそれが現実に合っていないなくても遵守し、同じよう

な考えの人といつも一緒に過ごし、新しい枠組みを考えることはせずに、言われたことを忠実にこなす」という人と「B正解のない問題に対して多様な人と対話をしながら、創造的で枠にはまらず、現在のルールが現実に合わせていなければ何が本当に必要かを考え、よりよい方策を見つけ出し行動ができる」という人がいるとして、会場の方は自分の子どもたちにAとBどちらを望むのか手を挙げてください。Aの方がよいと思う方は。

【挙手なし】

市長：Bの方がよいと思う方は。

【挙手あり】

市長：Bがほぼ全員ですね。では、「今の日本の教育を受けていれば、Bになれるのか」ということが重要です。今のままやっつけばよいと思う方は。

【一部挙手あり】

市長：手を半分くらい挙げている方がお一人ですね。私は今のままの教育でBのような人材が育つ感覚はない。先生方が子どものためにすごく一生懸命やっているはずで、子どもも不真面目なわけでもなく、教育局や役所も一生懸命やろうとしていて、みんな頑張っているはずなのに、全員がこうなってほしいという方向性になぜ今のままではなれないのかをちゃんと考えて、認識を一致させないと目指すべき方向性は出せないと考えています。私の考えているキーワードについては次回にして、現状を共有するために、10の間を用意したので、皆様の御経験からの御意見を出していただいで進めていきたいと思ひます。

- ・「こどもたちは学校を楽しんでいるのか？」
- ・「こどもたちは授業を楽しんでいるのか？」
- ・「卒業時にこどもが知っているべきことは？」
- ・「学校は何をするところなのか？」
- ・「先生の役割は何なのか？」
- ・「先生はなぜ忙しいのか？」

- ・「先生の自己肯定感はどうか？」
- ・「公教育の目的はどこにあるのか？」
- ・「こどもはどういう存在なのか？」
- ・「変えなくてはいけないことは何なのか？」

皆さんと認識を共有する過程を踏まないと良い大綱ができないので、皆さんの御意見をいただきたい。この間で何かを批判したいわけではなく、みんなが一生懸命やっているはずなのに何がうまくいっていないのかを考えるきっかけになってもらいたいと思って出しました。大事な部分で、優先項目として掲げているので、しっかり議論をして考えたいと思っています。「世界のあしたが見えるまち」と「世界のあしたの教育のトップランナー」を目指すためには、徹底した議論をして、Web アンケートなどで先生方の声も聞きたいと考えていますが、そのような進め方をしてもよろしいでしょうか。

【異議なし】

○「こどもたちは学校を楽しんでいるのか？」について

市長：どのような状態がよいかといろいろな事例を調べていると、遊びのように熱中できるものに取り組み、やり抜く力（GRIT）等もあるが、学校を楽しい場所なのか、精神修養の場所なのか等いかがですか。鈴木委員、お子さんたちは学校を楽しんでいますか。

鈴木委員：私の子どもも何かを聞くと「普通」ということが多いです。親から見ると批判精神が多い方なので、楽しくないわけではないが、学校に対する不満は多い。親なりに分析すると子どもたちが学校の主体となっていないのではないかと思います。決まりを守ることを常に言われ、その決まりに妥当性がなかったりすると先生に言いに行ったりする。例えば「置き勉」について異議を唱えると先生たちの時代からそうだったと相手にされず、「決まりを守る」がまず来るところが良くないのではないかと思います。

市長：ちょうど「置き勉」の話をしていて、フィンランドはもともと宿題がな

いので、教育大綱がどういう方向に行くかで、「置き勉」も教育大綱に照らせば判断になるようになるのではないかという期待を持っています。

倉田委員：集団の中で自己表現できる場であるかが重要だと思い、それが学びにつながっていると思う。学校に行って伝えたいこと、示したいことがあると喜んで行く。苦境を乗り越えていくにも、自己主張できる場（居場所）を設定できれば、集団の中で自分の良さを表現できる。それが、楽しさにつながってくると思う。

市長：自己表現や「自分であること」、「自由であること」などは、子どもの自己肯定感と密接につながっていると思う。どうやって子どもが自己表現できる場所を多く作っていけるかは、子どもにとっても非常に大事な部分だと思います。

小野村委員：私も元々教員をしていて、辞めようかと思っている頃に、ブルーハーツの歌の中で「どこかの偉い人がテレビでしゃべっていると今の若い人には個性がなさすぎると。僕らはそれを見て大笑い、個性があればあるで押さえつけるくせに」という歌詞があり、その頃教師だったので、押さえつけていた方で、自分は何をやっているのだろうと自分の仕事に疑問を持つきっかけでした。

教員を辞めて今不登校のこどもを支援しています。その中にはいろいろな子たちがいます。相談に来た子に「学校は楽しいですか？学校は自分のためになるのかな？」と聞きます。ためになると思うなら、行くように努力しようかと話すが、行ってもためにならない、嫌な思いをするだけとなると無理していかずにいいと話します。

私たちが迷ったケースで「三年寝太郎」のような子どもがいます。3日寝て3日起きる子など睡眠障害といえそうですが、この中にはとんでもない才能を秘めた子がいる。難しい数式を3日間考えて、解けましたよと言ってきて説明しているうちに寝てしまって3日間起きないといったような子について、教

員だったら学校の生活リズムに合わせなさいということになるが、私たちはそれをどこまで認めるかと話し合う。子どもの健康のためには睡眠のリズムをちゃんとした方がいいけれど、「睡眠障害」として無理矢理学校生活のリズムに合わせると、天才性を損なう恐れもある。私たちは常にこの子のどこにラインを引くべきなのかをスタッフで話し合い、考えていかなければならない。学校教育でも「一人一人の個性に合わせる」というのは簡単ですが、考えていかなければならない課題だと強く思う。

柳瀬委員：「三年寝太郎」は村では障害者だったのではないかなどいろいろな考え方があがるが、一つの解釈では、三年間どうやれば名主の娘を手に入れられるかを考えていたというものがある。大水の時に村人を救って、名主の娘をかつさらって飛んでいったときに自然界に帰って行く。ただ三年間寝ていたような人も世の中の役に立つという単純な解釈ではなかった。三年寝太郎一つとっても解釈は自由で多様だということで、子どもたち一人一人を見るのも正解や答えはない。うちの利用者のことをどう理解したらよいですかと聞かれるが、正しい理解はなく、より深く理解することだけ考えればよいという。一緒にいて時間が経ち、子どもたちがどう変化していくかを1年、2年、3年とずっと見ていくことでやっとその子のことが分かるのに、今の教育は短時間で評価し、成果を出そうとする。本来教育とは、長い目で見るべきだと思います。聖域無き改革により、学校に企業論理が入ってきて効率、成果、合理的など世の中と同じ価値観を持ってきて論じるが、本来学校は暇で自由な場所であり、労働から解放された自由がなければ school とは言わず学校ではない。みな社会的同調圧力で苦しんでいて、教員も子どもも同じような苦しみをしているように思う。私は、自由教育を7年半実践して、学校は楽しかったが、社会に戻っていく時に気づく。私たちが、主体性や自己表現、自由を取り戻していくために学校は自由の砦でなければならないと思います。

教育長：私のルーツは研究者であることを忘れないでほしいと教育局の職員に

言っている。教育社会学が専門なので、今の状態よりも良い社会になるために何をしたらいいのかを常に考えてほしいと話している。教育社会学者として答えると、もし子どもたちが学校を楽しいところだと思っていれば、結果としては小1から中3まで考えた時に年々もっと勉強したい、学校に早く行きたいとなるはずだが、藤沢市の中3に行っている学習意識調査では、1965年から5年に1回行っていて、1965年には7割が「もっと勉強したい」だったが、年々低下して、現在では「勉強したくない」という結果が多くなっています。様々な学校で類似の調査を行っているが、上級生になるにつれて「勉強したくない」、「学校に行きたくない」が増える傾向にあります。できるだけ現場に行ってみるようにしているが、子どもたちはよく我慢している、先生たちはこういう状況でもよく頑張っていると思います。ですから、心から楽しんでいるわけではないのかと思っています。公教育の目的については、学者仲間が共通して、今の教育制度では、国の発展のために役に立つ人間を作る、又は、選別して選び出すことを目的としていると言っている。学ぶ子どもたちが良い人生を送るために私たちは何をしたらよいかということベースにはしていない。学校は選別分配機能を行っているだけ。大阪大学の教授は「学校は格差生成装置」とも言っている。国の発展にメリットがある人間を選び出して、国の発展のために役に立ってもらい、そうでない人はそれなりにというのが学校の本質だと思っています。

TALISの国際調査で見れば、日本の先生はとても頑張っているが、充実感や自己肯定感は、海外の先生が7～8割に対し、日本では2～3割程度となっている。

市長：正確な数字は。

森田局長：3カ国平均91.2%が「全体的に見れば仕事に満足している」というのに対し、日本は85.1%と全体像としては低くないが、個別事項では低いということでした。

教育長：「自分が望むような生徒に育てていますか」などの個別の質問に対する回答は低いでしょ。

森田局長：個別は低いです。

教育長：だから学校で卒業時まで何を身につけさせるかということと言うと先生方は自分が望んでいるレベルまではできていないという意識があるのだろうと思う。

市長：調査やデータは大事だと思うのですが、つくば市では経年的に取っているものや定期的に取り替えている子どもの意識調査のようなものはどのようなものがあるのでしょうか。

森田局長：各学校が学期の終わりに生活評価をやっている中で、「学校は楽しいですか」は入っているはずだが、データとしてこちらでは扱っていないので回答としてはわからないですけれども。

市長：データを見れば、経年的な変化を見ることはできるか。

森田局長：子どものデータなので残しているかはわかりません。おそらく1年程度ではないかと思います。

市長：ちなみにどのような回答が多いのですか。先生たちの御経験でも。

倉田委員：4段階評価で、4と3で約85%出ていました。幼稚園では99%でした。

柳瀬委員：中教審の答申で平成25年度の意識に関する内閣府の調査で9割以上が学校生活を「楽しい」と感じ、保護者の8割は「総合的に見て学校に満足している」と感じている。おそらく内閣府の調査のつくば市で行ったものの資料はつくば市に残っているはずだと思います。

市長：今後のヒントにさせていただきたいと思います。

教育長：日本の子どもたちが自分自身に自信を持っているかを20年くらい前に総理府で行った調査の6か国の調査比較が出ていて、他国は学年が上がるにつれ上がるが、日本の子どもは上級生になるほど下がっている。原因を分析する



と、自分の成績に自信が持てなくなると自信も下がるという形で比例するという結果が出ています。

○「子どもたちは授業を楽しんでいるか？」について

市長：私の見たデータでは、アメリカでも同様の傾向が出ていて、ヨーロッパはまた違う傾向でした。私があえて「子どもたちは授業を楽しんでいるか？」と入れたのは、学校の楽しさにはいろいろな要素があって、自分の記憶でも友達と会えることや給食などは楽しかったが、授業は楽しかったかとなると面白いと思うこともあったが、学校の楽しさと授業の楽しさは別という印象がある。

小野村委員：教師が自分たちのことを客観視できているかといえば疑問を感じます。文科省の調査によると、英検3級を中学校卒業までに取れるようにしましょうというが、実際11%くらいしか取れていない。「受けてはいないけれど受ければ受かるだろう」と教師が思う子まで入れても、30%くらいという現状にある。高卒の到達目標は英検2級だったはずだが、今準2級となっていてそれでも11%というのが現実で、到達目標は全く達成されていない状況です。

私の子どもは楽しんで学校に行っていました。部の顧問が良く、子どもたちは楽しいと言って卒業して行きました。その先生が教えると普通の生徒でも全国大会に行くのです。そこでつくづく感じたのは、指導によって明らかに変わるということです。英語の授業でも同じことが言えて、良い授業を行っている先生だと素晴らしい結果が出るが、成果が上がっていない先生は少なからずいると思います。自分の授業が良いから成果が上がっていると誤解している側面もあると思います。

結論を言うと子どもたちが「学校が楽しい」と言っているのは、授業ではないと思います。ちょっとした工夫をすれば変わる子に対して、適切な指導ができていない。先生たちは一生懸命頑張っているが、ギャップが生じているのは確かではないかという気がします。

## 様式第1号

市長：特定の先生がいなくなると弱くなるというのはあると思います。倉田先生は教え子からの慕われ方が違うが、何が違うのでしょうか。

倉田委員：人間力というか、学校も組織で成り立っているので、一人の先生だけで存在するわけではないので、管理職としては学校の組織力をどう高めて、学校をより良いものにしていくかということだと思います。そのためには、教師同士が人間関係を良くして、認め合って、教師の良さを引き出せるような学校の体制でないと、助け合う協働精神が無いと学校は機能しないと感じています。「他人を知り、他人から学び、自分を知って卒業してほしい」と子どもたちには伝えてきた記憶があります。

市長：先生の実感からして授業という視点では、授業を楽しんでいると思いますか。

倉田委員：個人差があります。正直、指導力に差はあると思います。自分の授業をどう作り上げていくか、子どもたちとどう進めていくかをしっかり持っていないと難しい。それが教師自身の肯定感にもつながります。教え込むというよりも学び方に気づいてほしいという子どもたちが自分で学べる環境が大切で、そうしていかないと楽しい授業にはならないと思います。

市長：柳瀬さんはいかがですか。

柳瀬委員：芸術に関しては教えることはできません。放っておけばいいかというところではなく、芸術が生まれてくる環境や雰囲気はむしろ大事です。外国から障害を持ったアーティストを招き、共同生活したことで気づきました。一緒に部屋で絵を描くうちに、楽しそうに描いているのを見ていた子どもたちも描けるようになっていった。学校もそういう環境をいかに作るかが重要で、五感の体験が大事だと思います。学習を一つの体験とすると、体験をできる環境を作ることが大切だと思います。

市長：鈴木さん、お子さんたちや周りの方の授業の楽しさはどうですか。

鈴木委員：授業参観で、いろんな先生の授業を見て歩くと指導力は一目でわか

ります。子どもたちが集中して先生の授業を受けているというところで感じます。先生が多忙な中で、本業の授業を充実させることに時間を割けるような環境に持って行きたいと考えています。

うちの子は市の学校ではないですが、いろいろ厳しいことについては不満はありますが、先生たちが授業作りに熱心であるという点については、その学校を選んで良かったと言っています。校則などは厳しいが、市内の学校の子から聞く話と比べて、自分の学校の先生は、授業の準備に時間をかけてくれてわかりやすく、授業は非常に楽しいと娘は言っています。

市長：中1の国語の授業で、料理人が市場に買い物に行くという話で、先生が「さて今は何時でしょうか？朝？夕方？」という質問をしたところ、普段発言をしないような子どもたちも発言し、それだけで1時間もやりました。くくすることに意味が無いと思うが、発達に遅れのある子が授業後に、「僕はこういうところがあるからこう思うよ」と意見を言って次の授業でもまた議論して、教室がちょっとした感動に包まれた経験がありました。指導要領もあるので、いつもそんな授業とはいかないとは思いますが、指導要領は難しい存在で、『おおきなかぶ』の話扱う時に、指導要領では「一緒に協力することの大切さを教える」などと書いてある。小さな子どもは純粋な楽しさや、かぶが抜けたことの感動が一時的な感覚なのに、協力することが大事だぞとなることで、いかに授業がもったいなくなっているかという問題提起がされています。今の教育に限界が来ているという共通認識があると思います。でも、それではだめだから、次のステップに行かなければならないという段階に世界中が来ている、ということだと思います。指導力の有無の感覚値の割合はどのようなものですか。

小野村委員：私は教員になって、確か4年目だったと思います。嘘か本当か知りませんが、教頭から「お前はその年の採用試験において全県でビリだったが、当時の荃崎町は人数が多かったので、どうしようもなくお前を採った」と言

われたことがありました。授業があまりにひどいと校長からポケットマネーで研修に行かされたことがあります。確かにひどい授業をしていたと思います。しかし自分の授業がダメだということを認めると、翌日から学校に行けなくなりそうで、現実からは目をそらし必死で行っていたと思います。

なぜ教員を辞めずにいられたのかというと、上司や同僚に恵まれていたこと、そしてPTAに励まされたことにあります。ろくでもない教師だけれど、荃崎の子どもたちは宝物だから、その宝物を育てるお前は間接的に宝物なので、荃崎にいる間だけは大事にしてやると言われ、ずいぶん励ましていただいた。教育長の「社会力」がよく分かって、美浦村と武雄市が社会力を（それぞれ「教育振興基本計画」、「教育大綱」に）書いているが、その観点が入ってくると、地域ぐるみで支えられる仕組みができてくるとよいと思います。だめな先生がだめな所を見せていると子どもたちが補ってくれて、子どもが伸びるということもよくあることなので、「地域ぐるみ」はキーワードになると思います。

市長：指導力が無い先生たちも悩んでいると思う。悩んで自己肯定感が低くて本当にいいのかなと思っている人に、育成のシステムが機能していないようであれば、ちゃんと作らなければならない。校長先生のポケットマネーは素晴らしい話ですが、偶発的な話であって、つくばとしてはどういう仕組みがあれば先生方の自己肯定感が上がり、子どもたちが楽しい授業と思われるようになるかというのがあると思います。先生たちがどう学べるかが大切だと思います。

教育長：望ましい教育のイメージですが、私は昭和 22 年に小学校に入ったが日本の教育の歴史の中で、一番良い教育の時代だったと思います。児童、生徒の目で見たら、あの先生の指導力は高い、低いなどとは見てないと思います。当時は先生方に自由裁量があった。先生そのものが不足していて、20 歳で教壇に立っている先生が多く、授業力が高くはなかったと思いますが、先生自身が楽しみながら授業していたのが重要なポイントではないかと思います。緻密で

論理的な授業をする数学の先生はすごいなと思ったことはありますが、それ以外は授業の上手下手を意識したことはない。学校が楽しいか、授業が楽しいかは、先生自身が授業を楽しんでいるかが分かれ目ではないかと思います。

市長：学校は何をするところか、先生の役割、公教育の目的はどこにあるのかなどは特に聞きたいと思っています。御相談ですが、スケジュールはあるのですが、もう一度同じような形でフリーディスカッションの機会を作らせてもらってもよろしいですか。

【異議なし】

市長：それでは、それらを踏まえてたたき台を作っていきたいと思います。急いでやっつけでは作りたくなく、本当はもっと先生やPTAからの話を聞きたいというのがあります。折々そういうのもできれば、入れられれば、と思っています。ロードマップからはずれているのは遅れとして認め、教育委員会と併せて委員会の前後どちらかで開催をお願いしたいと思うので、子どもたちがどう思っているかなどの学校の基礎データは教育局で見てもらって、情報としていただければと思いますが、よろしいでしょうか。

【「はい」と呼ぶ声あり】

### (3) 教育大綱策定スケジュール（案）について

事務局：第2回目は7月を予定しております。詳細の日程は教育局と調整の上、確定させてまいります。それ以降は教育委員会の日程に合わせて実施するなど今後調整してまいります。

市長：ありがとうございました。進め方等について何か御意見などありますでしょうか。

【意見なし】

市長：以上で予定した議事を終了いたします。良いものを作っていきたいと思っていますので、よろしく申し上げます。

事務局：長時間に渡りまして御協議ありがとうございました。これをもちまし

様式第1号

て平成30年度第1回つくば市総合教育会議を終了します。ありがとうございました。

以上

# 平成30年度第1回つくば市総合教育会議次第

日時：平成30年5月29日（火）13時30分～

場所：5階庁議室

- 1 開会
- 2 市長挨拶
- 3 協議事項
  - (1) 教育大綱の概要について
  - (2) つくば市教育大綱の方針について
  - (3) 教育大綱策定スケジュール（案）について
- 4 閉会

事務局：総務部総務課

：教育局教育総務課

## ◇◆教育大綱策定について◆◇

1 目的	地方公共団体としての教育政策に関する方向性の明確化
2 策定方法	(1)教育基本法第 17 条第 1 項に規定する基本的な方針（国の教育振興基本計画）を参酌し、その地域の実情に応じて策定。 (2)総合教育会議において、 地方自治体の長と教育委員会が十分に調整・協議した上で定める（変更する）。
3 策定事項	(1)地方公共団体の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策について、その目標や根本となる方針を定めるもの。 (2)主として、学校の耐震化、学校の統廃合、少人数教育の推進、総合的な放課後対策、幼稚園・保育所・認定こども園を通じた幼児教育・保育の充実等、予算や条例提案等の地方公共団体の長の有する権限に係る事項についての目標や根本となる方針が考えられる。
4 留意事項	(1)法律に対象期間の定めはないが、概ね 4～5 年を想定。 (2)詳細な施策について策定を求めるものではない。 (3)地方公共団体の長に大綱の策定権はあるが、教育委員会の権限に属する事務の管理・執行の権限までは与えられていない。
5 効力	(1)地方公共団体の長と教育委員会による調整がつき、大綱に記載した事項は、双方が尊重義務を負い、それぞれが所管する事務を執行する。 (2)結果として大綱に定めた目標を達成できなかった場合も、尊重義務違反にはならない。 (3)調整がつかない事項を大綱に記載した場合、教育委員会は尊重義務を負わない（執行も同じ。）

## ◇◆教育大綱と教育振興基本計画の違い・関係について◆◇

	教育大綱	教育振興基本計画
根拠法令	地方教育行政の組織及び運営に関する法律第 1 条の 3	教育基本法第 17 条第 2 項
策定	必須	努力義務
策定主体	地方公共団体の長 ※総合教育会議において要協議	地方公共団体（の教育委員会）
策定方法	国の教育振興基本計画を参酌し、その地域の実情に応じ策定	
範囲等	地方公共団体の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱	地方公共団体における教育の振興のための施策に関する基本的な計画
本市の策定状況	未策定	平成 28 年度に教育委員会が「第 2 期つくば市教育プラン」を策定



教育大綱策定スケジュール(案)

事業概要		地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正に伴い、地方公共団体の長は総合教育会議を設け、大綱の策定が義務づけられた。会議は、地方公共団体の長が招集し、原則公開として会議録の作成及び公表が義務づけられている。 【構成員】市長、教育長、教育委員														
		作業番号・作業項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
1	総合教育会議の開催		○ 第1回													
2	行程							→ 市民からの意見募集		○ 庁議 大綱(案)の付議		→ 12月広報紙掲載		→ パブリックコメント		→ 大綱の決定